

鹿児島大学法文学部紀要
「人文学科論集」第64号(2006)別刷
2006年7月発行

ダーウィニアン社会学から、ハイブリッド行為論へ

桜井芳生

ダーウィニアン社会学から、ハイブリッド行為論へ

—なぜ「善人」は、就職できないのか？／
就職をめぐる「非合理的選択」をいかに理解するか？—

桜井芳生

sakurai.yoshio @nifty.com

<http://ember.nifty.ne.jp/ysakurai/>

【はじめに】

筆者は数年来、近年進展の著しいダーウィン生物学の成果とゲーム論の成果を直裁にふまえた社会学を試行してきた。それは、その種のアプローチにつきものの誤解に直面しやすいことがわかつてきた。ここでは、そのようなありがちな誤解からわれわれのアプローチをすくいだすために、「ハイブリッド行為（者）モデル」とでも呼びうるものを素描し、今後の展開の一助としたい。

【かなり正確な知覚、かなり合理的な選択、それほど正確ではない解釈】

まずはなしの発端となる私のゲーム論的モデル（桜井2006）ならびにそれへのコメントから紹介し、考察してみよう。

拙稿をおよみでないかたがほとんどであろうし、若干ゲーム論的に込み入ったモデルなので、自然言語で、ここで必要な部分のみ、かいつまんで紹介しよう。

それは、ナッシュの交渉解の議論を援用して、ゲームの状況（正確にはゲームの定義）、この場合には、二人のプレイヤーが四つの社会状態にたいして

もつ効用値が連続的にわずかずつ変化する場合に、両者がもつ効用値の「順位」が変化しなくとも、両者の権力に対する位置が非連続的に変化する場合がある、ということを論ずるものであった。後者のような状況の変化を「権力論的状況の変化」とここでは呼んでみよう。とくに、状況が「微細に変化して、当事者がこのような「権力論的状況が変化」したことを気づかずに」いる場合に、振る舞いとしては別の権力ゲームであっても、意識がそれにおいつかない場合があるのでないか、と論じた。

このような、拙論にたいして、以下のようなコメントをちょうだいした。
すなわち、

プレイヤーたちは、状況が変化したことを「知って」いるのか、いないのか?。「知っている」としたら、意識がそれに追いつかない、とはへんであるし、「知っていない」としたら、それに応じたゲームをプレイすることができないのでないのではないか、と。

ゲーム論的な視点からすると当然のご指摘だろう。

私にとっての、議論の前提となる、いくつかの先行研究を紹介し、ふたたび、この問題をかんがえてみよう。

【「意識という幻想」論】

ノーレットランダーシュは、有名なりベットによる実験による発見を援用して、「意識という幻想」「ユーザーイリュージョン」という議論を展開する。リベット実験による知見とは以下のようなものである。

彼の実験は、いわゆる自由意志に関するものということができる。彼が照準したのは、刺激に対する反応ではなくて、被験者自身が起こす自発的行為である。被験者に自分で勝手に自分の都合のいい時刻にたとえば指を曲げるということをしてもらうのである。

リベットは、この行為自体が生じた時刻、被験者の脳内での電位の変化、

さらに被験者自身がその行為の実行を意識的に決意した時刻の三つを記録した。

この実験の生命線が、被験者が行為の実行を意識した時刻の計測にあることはいうまでもない。リベットは、被験者をテレビ画面のまえにすわらせ、画面にある時計の秒針のように円を描いて動く点をみせた。ふつうの秒針とはちがって、2.56秒で一周する。これを使えば、決意を意識したときに点が時計のどの位置にあったかをたずねることによって、その時期を特定できる。検証のための一連の対照実験を実施した結果、この方法で時期特定が有効であることが確認された (Norretranders 1998=2002:268)。

リベットの実験は以下のようにおこなわれた。被験者は快適なラウンジチェアに座り、リラックスするように指示される。前述の時計の文字盤の点がぐるぐる回るのをみながら、好きなときに指を曲げるか手を動かすかする。被験者には、実際にそうしたくなるまで、つまり衝動や決意や意図を感じるまで待つことを強調しておく。被験者はそうした衝動を感じるまで待ち、それからそれにしたがう。同時に、動かそうという衝動を感じた瞬間の、時計上の点を位置を記憶しておく。

この方法により、リベットは三種類のデータを手に入れた。被験者が行為を行う決意を意識的に下した時点、実際に実行した時点、そして脳内電位が変化した時点、とである。

結果には疑問の余地はなかった。脳内電位の変化が、動作の0.55秒前に現れ始めたのにたいし、意識が始動したのは、行為の0.20秒前だった。したがって、決意の意識は脳内電位の変化（準備電位と呼ぶ）の発生から0.35秒遅れて生じていることになる。リベットは言う。「結論を言えば、本実験で調べたような自由意志による自発的行為でさえ、脳レベルでは無意識のうちに始動しうるのであり、また、現に通常、始動しているのだ。」「以上のことから、あらゆる意識的かつ自発的な行為が行われる500ミリ秒程度前には、特別な無意識の脳プロセスが始動していると考えられる」(Norretranders 1998=2002:270)

ノーレットランダーシュは、以上のリベットの実験結果・発言をふまえて、私たちの行動は無意識のうちに始まっている。自分で意識的に行動を決意したつもりでも、実際は、その0.5秒前から脳は動き出している。「意識が行動を始めているのではない。無意識のプロセスが始めているのだ」(Norretranders 1998=2002:271)という。「意識は、決定を下すのは、自分で、自分が私たちの行動を引き起こしている、と主張する。しかし、実際に決定がなされるときは、その場にいもしない。意識は遅れてやってくるのに、そのことを黙っている。意識は自らを欺いている」(Norretranders 1998=2002:271)という。

リベットは、第二実験をおこない、この意識の約0.5秒の遅れが、「主観的経験の繰り上げ」によって、あたかも刺激と同時であるかのように意識されているという仮説をたて、その仮説にもとづき、第三実験をおこない。肯定的な結果を得ている。

「外界を経験するまでには少しは時間がかかるのだが、私たちはそれにおかまいなしに時をさかのぼってその経験を過去に置き直すことにより、リアルタイムで世界を経験しているように感じている」(Norretranders 1998=2002:293)。「意識はその持ち主に、世界像と、その世界における能動的主体としての自己像を提示する。しかし、いずれの像も徹底的に編集されている。(略)。意識は、行為を始めているのが自分であるかのような顔をするが、違う」(Norretranders 1998=2002:295)。

【行動する脳、解釈する脳】

以上のリベット実験の紹介について、ノーレットランダーシュは、コネル大学の神経学者マイケル・ガザニガの仕事を援用する。とくにガザニガが行った研究のなかでも最も劇的なものとして、P・Sという名で呼ばれる患者を対象にした研究をあげる。

P・Sは、二つの脳半球を外科手術によって分断された患者であった。P・Sが、劇的な事例となったのは、彼が、研究対象となった患者としてははじめて、右脳にもはっきりとした言語能力が示されていた（文字カードで言いたいことを表現した）ということだった（Norrestranders 1998=2002:341）。

P・Sは、視野の右と左に別々のものが描かれている絵を見せられた。そして、ほかのものが描いているカードを何枚か与えられ、見たものと関連あるカードを選ぶように指示された（Norrestranders 1998=2002:342）。右脳は雪の風景をみたのに対して、左脳はニワトリの足を見た。すると、P・Sは、（右脳に対応している）左手でシャベルを指さし、右手でニワトリをさし示した。ここまででは、完全に理にかなっている。しかし、つづいて起こったことに、ガザニガは愕然とした。

「彼が答えを示した後、私はこう尋ねた。『ポール、なぜそう答えたんだい？』するとポールは目を上げ、何のためらいもなく、左脳で答えた。『簡単ですよ。ニワトリの足はニワトリと関係があるし、トリ小屋を掃除するためにシャベルが必要だからです』」（Norrestranders 1998=2002:342）。

P・Sの左脳は、雪に関するものを何も見たり聞いたりしていない。知っているのは、ニワトリのことだけだ。ところが、（右脳に対応している）左手がシャベルを指しているのは見える。そこで、左脳は即座に、躊躇なく、左手がやっていることについての答を考え出した、とノートレットランダーシュは言う。

ガザニガはこう書いている。「脳が分離されているため、左脳は右脳がなにを見ているのか閑知していない。だが、患者の体自体がなにかをしている。（略）。左脳の認知システムとしては理屈をつける必要があり、この特定の課題に関して自分が与えられた情報から、筋の通る論理をたちどころに考え出したのである」（Norrestranders 1998=2002:343）

この臨床実験で注目にあたいるものは、P・Sの答え方に、ためらいもなければ、心許なさもなかったことである。P・Sの左脳は、自分の行動に、実際ありもしない理屈をつけるため、まったく躊躇することなく、喜んで

ちょっとした作り話を編み出した (Norretranders 1998=2002:344)。

分離脳患者が、「歩け」という指示を無言の右脳で受け、すぐに席を立て実験室を出ていくとき、そんなとき、どこに行くのかと訊かれると、左脳が「コーラを飲みに家に帰るのです」などと答える。自分がしていることを意識していなかったとき、ひとはこのような偽りの説明を考え出す、と、ガザニガの共同研究者レドゥーは指摘する (Norretranders 1998=2002:345)。「私たちは、アタマの中で処理される情報も、自分の起こす行動の原因も、自分の経験する感情の源も、そのすべてを意識的に自覚しているわけではない。しかし、意識ある自己は、それらをデータとして利用し、筋のとおった話、自分なりの話、主観的な自己像を、組み立てて維持する」とレドゥーはいう (Norretranders 1998=2002:345)。

【脳のモジュール性と、非言語性】

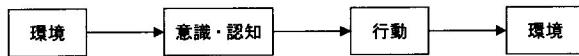
上記に関連して、ガザニガ自身は、以下のように述べている。

「私の解釈では、正常な脳は何百いや何千ものモジュール型の処理システムという形で成り立っており、こうしたモジュールが通常は言語的な（ノーレットランダーシュ的に言えば「意識的な」＝桜井）コミュニケーションによってではなく、実際の行動によってしか自己表現することができない。こうしたシステムの大部分は,,, (略),,,, できごとを記憶することができ,,,,, (略),,,, さらに特有の記憶に関連のある刺激に対して反応することができる。こうした活動は、日常的に犬、サル、そして人間にみられるものである。これらの活動は、言語を介さず、そして思う存分進められる。,,, (略),,, つまり私が言いたいのは、この新しく抱いた気分を、説明しなければならなくなってしまった結果、それまでの中立的、否定的あるいは肯定的ですらあったできごとをもっと否定的に解釈し始めてしまったということである。,,, (略),,, 人はその信念と実際の行動が一致していない状態で生きていくことはできない,,,。どうにかしなければならず、それはたいてい信念にたいしなんらか

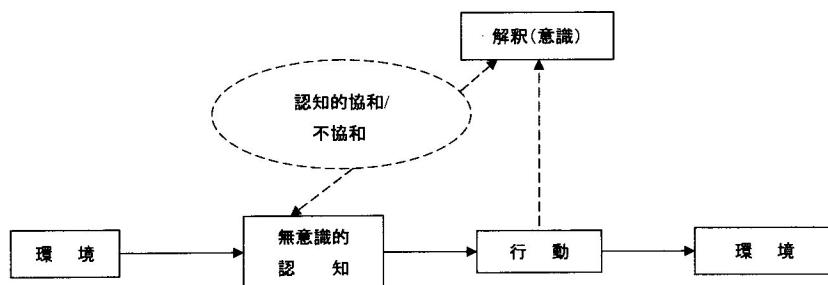
の価値を与えるという形で解決される。これがフェスティンガーの認知的不協和理論の主旨である。」(Gazzaniga 1985=1987:104-106)

以上のような議論を、以下のように模式的に、図式化することができるだろう。

まず、「常識」的な「意識と行動の関係」のモデルは以下のようになる。



これに対して、われわれの「意識と行動の関係」モデルは以下のようにあらわすことができるだろう。



【ハイブリッド行為（者）モデル】

以下、上記の研究を参考にして、われわれのモデルを定式化・説明してみよう。

まず、「環境→無意識的認知→行動」の部分については、まず第一次的近似として、合理的選択論・ゲーム論を援用する。ゲーム論が社会科学の現进展段階において、もっとも応用範囲の広い理論であると考えるからだ。「つよい合理的選択理論」のようにわれわれは、いわば「存在論的？」にヒトの

行為の合理性を仮定しはしない。行動経済学・実験経済学のように、ヒトの行動に効用最大化を仮定しない理論も叢生している。筆者は、それらの諸理論の進展を待っている。あくまで、プラグマティックに、まずは、ヒトの行動に合理性（効用最大化）を仮定し、それで説明できない部分を、行動経済学的な理論でフォローしていくという戦略をとりたい。

ヒトの行動のほとんどは、ここまでモジュールで説明できてしまう、という仮説をわれわれは採る。上記の援用研究にみられるとおり、ヒトの行動のほとんどは、無意識的知覚とそれへの反応である可能性がたかい。

ヒトがおこなう行動のごく一部が、意識の対象となる。そして、意識の対象となった行動のそのまた一部が、意識によって「解釈」される、と仮説する。

どのような場合に、このように「意識的解釈」が自分の行動に対してなされるのか。これに対しては、いまだ、枚挙的な答案をもっていない。今後の課題としたい。しかし、ひとつのヒューリスティックとして、「自分ないし他人へのいいわけ（自他弁証）」が必要とされるときにこの「意識的解釈」が発動する傾向が高いと仮説している。もちろん、このような答案は、「では、どのようなときに、自他弁証が必要となるのか」という問い合わせ先送りでもある。

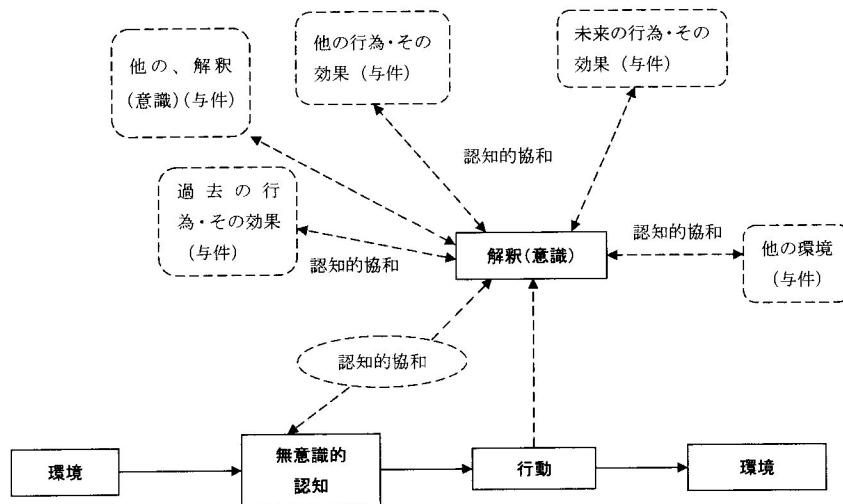
くりかえすが、したがって、すべての行動が意識的解釈されるわけではない。上図モデルにおいて、「行動→意識的解釈」の矢印を「破線」として標記しているのはこの含意のためである。

それでは、「意識的解釈」が発動するとして、それはどのように「解釈」されるのであろうか。

この問い合わせにかんして、われわれは、第一仮説として、他の諸与件との「認知的協和を保持するように」との答案を探りたい。

説明しよう。上図においては、簡便化のため省略したが、行為者は当該の行為をするにどまらない。他の行為も同時におこなうし、すでにおこなった行為ならびにその足跡も残っている、予測されるおこなうつもりの行為な

らびにそれによる予測される結果もある。また、必ずしも自分に責はなくとも、その行為がなされるさいの後景となるような環境諸要素が存在するだろう。また、他の行為に関連しておこなった他の「解釈」も存在するだろう。これらの、諸事件と「協和する」（というか正確には「不協和しない」）ような「解釈」をおこなう蓋然性がもっともたかいと仮説するのである。（下図）



【「協和的解釈」が不協和になるとき】

さて、問題は、このように、もともと「協和」的に解釈が発生すると仮説しているのに、なぜ、認知的な不協和が発生しうるのか、ということであろう。

これにかんしても、最終的にはケースバイケースとしかいいようがないだろうが、まずは考えてみるべきなものとして、「社会変動期」に目星をつけている。

この着目が効果をもつのは、まさに、われわれのモデルが、「無意識における知覚・無意識による合理的行動」を重要要素としているからである。

説明しよう。

意識における情報の処理量は、無意識において処理される情報量にくらべると、桁違いどころか数桁ちがう（少ない！）ことが推測される。そして、無意識における情報処理においても、かなり合理的にヒトは情報を処理し行動を選択することができる。典型的な例が、熟練した自動車ドライバーによる車の運転である。熟練すればするほど、彼はとくに意識することなく、彼自身の生命をかけた情報処理と行動の選択を合理的に問題なくおこなうだろう。

だとすれば、運転以外の「行動の選択」においても状況の微細な変化に対応して、合理的な行動の変化を行うことができる（場合が大半である）と期待できるだろう。

それにたいして、意識の方は、上述の処理情報量の低さからして、いわば、「解像度が低い」。状況が微細に変化しても、それを覚知・追尾できるとは限らない。

しかも、意識による解釈は、一種の「物語」であって、上図のような「諸・与件」との「認知的協和」関係のもとで構築されている。たとえばみれば、トランプカードのシークエンス（ひとそろい）のようなもので、ある「役」がそろってみれば、その一枚を任意に変化させていいものではなってしまう。

このため、ある状況の変化にたいして、この意識的解釈（のシークエンス・組み合わせ）が、マルクス的な意味での「桎梏」となることがありうるだろう。

こうして社会変動以前においては、認知的に協和していた解釈が、社会変動後においては、（少なくとも、諸意識的解釈の一部相互が）不協和に陥ることがあるだろう。そして、不協和におちいりつつも、それが容易に改訂しにくい場合もあるだろう。

たとえば、抑うつにおける認知バイアスなども、この一例である（場合がある）と、私は見通している。

ベックによるいわゆる「認知革命」以来、抑うつと認知との関連は、実証

的に認められているといえるだろう。しかし、合理的選択論者にとって、抑うつ的認知は不可解な現象ではないだろうか？なぜなら、（抑うつを帰結する）否定的認知バイアスによって当該個体の効用は低下する場合がほとんどだからである。

ここで、注目されるのが、いわゆる「抑うつリアリズム」論である。アロイらは、抑うつ者の認知の方が、健常者とくらべて現実をより正確に認知している場合があることを実証的に示した。すなわち、その事例においては、健常者の方が、過度に楽観的な認知バイアスをもっていたのである。

抑うつリアリズム論は、その後、実証的追試をうけて、単純な一般化はできないことがわかっている。すなわち、抑うつ者が認知的に健常者よりも、ヨリ正確であるとは一般的には、いえるわけではない。

私は、この抑うつリアリズムと、抑うつ者の否定的認知バイアスの問題を、上述のような「社会変動論」的枠組みで再び位置づけなおすことができるのではないかと見通している。

すなわち、ある状況においては、抑うつリアリズムはまさにリアリズムとして、正確な判断であり、かつ、その認知個体にとって合理的（効用の期待値を最大化する）ものであったのではないか。

しかし、与件が変化しても、認知の傾向性は迅速に変化しなかった。そこにおいて、彼（女）の認知傾向は、否定的バイアスがあるものになってしまったのではないかだろうか。

ここまでなく、以上はあくまで、机上の思弁（スペキュレーション）である。今後の実証的検証を期したい。

【「認知療法」のマクロ的応用としての、臨床マクロ社会学】

同様な、与件の「変動」と認知との非協和性を、マクロ社会学的にも、応用してみることができるのではないかと考えている。

筆者ならびに、合理的選択論者（の多く？、何人か？）が、想定している

ところによれば、ヒトというものは、ほとんど自分の利害に即して、行動するものである。そして、その際の行動の多く（ほとんど）は、とくに意味づけなどされていない、いわば無意識な行動である。

しかし、（ここからは、ほとんど筆者一人の想定だろうが）、ヒトは、ある場合には、みずからがおこなっている行動、みずからが行った行動がその構成要素となっている前の社会状態にたいして、なんらかの「自他弁証」をおこないたくなることがあるようである。どのような場合に、この「自他弁証」をおこないたくなるかは枚挙的にわかつていいが、たとえば、自分がやっていることがかならずしも（少なくとも短期的・合理的）に自分のトクになっているかどうか不安になる・疑わしい・明らかにそうでなく見える、ような場合が多いようである。

そのような場合（の一部）に、「意味」を使用することがある。たとえば、職業であれば、そこに「生き甲斐」とかアイディンティティーとかいった意味づけを付与してしまう（場合がある）。

この意味によって、うえの不安がなぐさめられる（場合がある）。そして、その結果、事態（ゲーム論的な意味での均衡）が、（ある視点から、誰かの視点からみて），よりよくなる場合がある。

これが私がおもいえがいている、合理的選択理論の意味論的修正である。

しかし、与件が変化すると（ゲーム論的にいって、ゲームの定義（各プレイヤーの選択肢や利得表）が変化すると），その意味が、マルクス的な意味での「桎梏」となる場合がある。新均衡値への速やかな移行へ、当初の意味への「固執」が障害となる場合がある。

職業の場合においては、生き甲斐やアイディンティティーといった「意味づけ」が、いまや、その障害になっている、というのが、私のみたてである（後述）。

したがって、社会学者が当事者社会にたいしておこなうべき「介入」がも

しあるとすれば、そのようないまや「重荷」となった意味（認知）を、よりよいものに修正する、もしくは、たんに無化することを支援することとなるだろう。

このような意味で、私が行おうとしている社会学的嘗為は、いわば、「マクロ的認知療法」といえるかもしれない。

認知療法にとっては、ひとつ、理論的に困難なアポリアがある。それは、なぜ、クライアントは、みずからが苦しみような「認知」をもっているのか、という問いである。

私は以上のように、「ズレ」派的ダーウィニスト的に回答する。すなわち、「以前は、適応的であった認知」が、「与件が変化することで、非適応なものになってしまった」のだ（認知自体は変化していないのだ）。と。

【ケーススタディとしての「新卒無業】

このような視点は、昨今、日本社会で問題となっている「新卒無業」現象に関してもあらたな光をなげかけてくれる、と思う。

また、本視点の、ケーススタディとしても、このトピックは論ずるに値すると感じられる。

説明しよう。

まず、ひとつ、象徴的なエピソードを紹介しよう。

過日、9月も中頃、私の勤務学部の就職委員の教員から、メールがきた。地元の中堅金融機関（○○信用金庫）から「再度」本学部に求人の依頼が来た、とのことであった。その会社さんでは、十数名の採用を予定し、過日も求人し、会社説明会をしたのであったが、説明会には、本学の学生は一人も出席せず、地元の他の文系私立大学の学生さんのみが数十名出席された、とのことであった。その会社さんでは、本学の出身者を名指しで採用されたいとのことだが、一人も応募がない。9月中旬現在、本学の卒業予定生の全員が内定をすでにとっているとはおもえない。また、9月中旬時で内定がない

学生は、他の会社と「ただいま選考中」である可能性も低いだろう。

そのメールの最後には、学生本人が、直接、その会社の人事部に連絡して、会社訪問するように、教員は指導学生に勧めるように、とある。

しかし、少なくない学生の進路選択を間近にみてきた私からみると、「直接、人事部に連絡して、会社訪問する」学生はほとんど存在しないと予想される。

つまり、「就職口」は「ある」のである。しかし、一部の「ブランド企業」以外には、「本気で申し込もう」としないのだ。

【「就職＝ロマンティックラブ」イデオロギーの崩壊と固着】

ここには、就職にかんする、ある一つの「意味」への固着が存在するとおもうのである。すなわち「ロマンティックラブ」イデオロギーである。

「ヴァージン」である「私」が、「相手」と、「運命的な出会い」をして、「一生添い遂げて」いく、といった、暗黙の前提である。

「新卒正社員採用から終身雇用へ」というのは、戦後社会においても、かならずしも大多数的事例ではなかった（特に女性の雇用を考慮すれば）。

そうでありながらも、「新卒正社員採用・終身雇用」がモデル（理念型）であるかのような思いこみがどこかにあったのではないか。

とくに、四年生大学に入学できれば、大学の「格」におうじた「それなり」の会社へと「新卒正社員採用・終身雇用」されるという暗黙の思いこみがあつたのだろう（とくに男性学生の場合）。

この意味で、四年生大学とは、日本においては、「立派なお嬢さんとの結婚」を約束する、いわば「男性の花嫁学校」であったといえる。

この前提を壊したのは、おもにまず、会社側であったようである。日本においては法律上解雇が困難であるので、肩たたきや窓際族などで、現実上の「離婚可能」への口火を切った。

しかし、少なくとも学生の多くにおいては、無意識で、この「就職ロマン

「ティックラブイデオロギー」への固執がみられるおもう。

こう考えると、なぜ、学生が、「どんな会社でもいいから、とりあえず、内定とっておく」のを忌避するかが理解できるのだ。あるいは、他の仮説からは、この現象の理解がとても困難である。

学生は、「こんな会社に内定しちゃったら、ボクの人生、一生決まってしまう！」と前提しているようなのである。

いうまでもなく、これは、非合理的信念である。雇用者側からの解雇は困難だが、被雇用者側からの辞職は容易（実際上自由）だからだ。

この視点は、いわゆる「第二新卒」ブームもある程度説明してくれるとおもう。

ここでも、結婚（恋愛）との類推を、すすめてみよう。いわば、「ヴァージン」の相手とつきあうのは「重い」ようなものだ。あるいは、自分がヴァージンであるのも重い、ようなものだ。

会社側にとって、第二新卒はいくつかの魅力がある。まず第一に、相手（求職者）が「バツイチ」であるだけ幾分気楽である。法律上は、解雇の困難さは、新卒とかわらないかもしれないが、気分的に「相手もやめた経験がある」だけ、ラクだろう。

第二に、平均的・傾向的にいって、人件費が安い。日本では、若年層においても、転職で給与が下がるのがふつうである。

第三に、求職者は職場に「過度な期待」をしていない。前職場をリタイアしたとはいえ、相手（求職者）は、「日本の会社の現実を肌身で」知っている。「新卒」者たちが、「四月病」「五月病」ですぐやめるのとはちがうと期待できる。

第四に、新卒者よりもすこしはビジネスマンとしてのスキル・常識をもっているかもしれない。

以上のように、第二新卒への「需要」が存在するのは合理的な理由がある。他方、第二新卒に関しては、「供給」側もことかかない。豊富な供給が存

在する理由は数点指摘できるだろう。

第一は、まずは、無職者の存在である。「第二新卒」市場といいつつ、「供給」は、新卒正社員を「やめた」求職者とは、かぎらない。大学卒業時に、無業だったものも含まれる。これらの者が豊富に存在することはいうまでもない。

第二は、新卒時に正社員就業したけれども、離職した者の存在である。なぜ、離職が多いかというと、それは、上述にあげたいくつの理由で多くは説明できるとおもう。

すなわち、「四大（四年制大学）幻想」「ロマンティックラブ幻想」をもつているがゆえに、たとえ、内定をとり、入社したとしても、不満をもって、入社している。そして、その「不満にもとづいた予期」が入社後の中してしまう。

しかし、ロマンティックラブイデオロギーはあまり捨てていない。

そのため、「天職」をさがして、離職してしまう。

【コミットメントへの「自他弁証」としての「就職ロマンティックラブイデオロギー】

以上の点をかんがえる前提としても、まず、近い過去における「就職ロマンティックラブ」イデオロギーが、それ自体としては、まさに虚偽意識であったことを確認しよう。

戦後高度成長期からバブル崩壊までにおいても、いわゆる有力企業の人事採用は、学校歴（入学大学の格）を前提とした比較的短期での相互お見合い方式であった。求職側も求人側も、たがいに相手の格と自分の格をにらみあって、「相場にみあった」結果で、「手を打つ」という方式であった。ここには、ロマンティックラブイデオロギーにおいて要件といえるような「運命的な出会い」といったものは、べつに存在しない。

しかし、ここにおいて、ロマンティックラブイデオロギーにいたものが存在したように（とくに現在の就活学生から逆に遡及して推測すると）思われる。

それは、なぜ、か？。

この問い合わせについてはいろいろ回答はありうるだろう。そしてまた、実態としても複数の要因がからまっていることだろう。が、わたしとしては、以下の仮説を提起してみたい。

それは、被雇用者のセルフコミットメントへの、被雇用者自身への弁証として、ロマンティックラブイデオロギーが「要請」されてしまった、という仮説である。説明しよう。

周知のように、戦後日本の大企業においては、（実態はともかく少なくとも理念的には）終身雇用制が保持されていた。

これは、被雇用者にとっては、ほとんど解雇されることを心配しなくてもいい、非常に有利な体制といえる。しかし、人間は、贅沢だ。これはこれで、心理的な不満が、生じうる。

すなわち、「就職（就社）」した瞬間に「人生が終わりまで見えてしまう」という不満である。

この不満を慰撫する機制がおもに二つあったとわたしはかんがえる。第一が、ロマンティックラブイデオロギーであり、第二が会社によるアイデンティティの供給である。

就職（就社）によって、「人生が見えてしまう（人生が終わってしまう）」ことへ代償として、その就職（就社）が、あたかも「神様によって赤い糸でむすばれていたか」のような運命的な出会いとして、擬制された。そして、その被雇用者のアイデンティティは、「有名〇〇会社のエリート社員」として供給された。

この仕組みは、また、被雇用者が（雇用側が好まない）転職を阻止する効果も少しあっていたのだろう。

いうまでもなく、終身雇用制下においても、被雇用者の退職の自由はほと

んど保証されていた。そのような被雇用者を「つなぎとめる」必要が存在しだろう。もちろん、第一には、「他の大企業も新卒終身雇用」を前提にしているがゆえに、中途入社が不利であったことが、このつなぎ止めに機能した。しかし、これは、少数者でも違うシステムにのりかえれば、機能しなくなる「保証」でしかない。それにくわえて、「退社すれば、神からあたえられた運命（使命）を裏切ることになる」「〇〇社エリート社員というアイデンティティを取り上げる」という心理的「脅し」も効いていたと私は考えている。

以上のような高度成長期においては、機能的であった「ロマンティックラブイデオロギー」「社格によるアイデンティティー供給」機能が、逆機能的となっているのが、現状である。と、私は考えるわけだ。

以上の様な視点で、われわれがすでにおこなった調査のデータを再検討してみた。ひとつ、非常に興味深いデータ上の振る舞いがみいだされたので、紹介して本稿をおわりたい。

「善人ほど、就職内定がとれない」というデータである。

【調査の概要・結果】

2005年11月から12月にかけて、南九州のある国立大学法人の学生たちによって、周囲の学生を中心とする知人たちを対象にして、二段階スノーボール式非無作為抽出によるアンケート調査がおこなわれた。依頼数186ペア、回収数155ペア。回収率83.3%であった。無作為抽出ではないので、以下の検定にかんする言及は参考程度に読んでほしい。

このサンプルから、大学四年生のみを分析してみた。

就職未内定を「0」、それ以外を「1」とし、他の質問項目すべてとの相関（ケンドールの順位相関係数）をみてみた。

就職の成否・SPIテストの対策など、意味的に同義・自明なものを除くと、有意な相関を示したのは、上の、「x 挑戦安全」から「cm 借金」の6変数であった。「bw 善人」と負の相関であることが注目される。この変数（質問）の文言は、「あなたは自分のことを「善人」だと思っていますか？ bw → 6. かな

相関係数

		未内定 0 その他 1
Kendall のタウ b	未内定 0 その他 1	相関係数 有意確率 (両側)
		1.000 . .
	N	66
x 挑戦を安全より優先	相関係数 有意確率 (両側)	.227(*) .047
	N	63
at 意欲的人生をおくつ ている	相関係数 有意確率 (両側)	.283(*) .013
	N	65
bw 自分を善人だとおもう	相関係数 有意確率 (両側)	-.272(*) .015
	N	65
ca 情はひとのためなら ずとおもう	相関係数 有意確率 (両側)	.301(**) .008
	N	64
ck 無酒でも平氣	相関係数 有意確率 (両側)	.279(*) .019
	N	65
cm 借金したことある	相関係数 有意確率 (両側)	.347(**) .003
	N	66
性別1女0男	相関係数 有意確率 (両側)	.236 .059
	N	65

* 相関は、5 % 水準で有意となります（両側）。

** 相関は、1 % 水準で有意となります（両側）。

り、そう。 5. まあ、そう。 4. どちらかというと、そう。 3. どちらかいうと、そうでない。 2. まあ、そうでない。 1. そうでない。」というものであった。

他の変数がすべて内定取得と正の相関を示しているだけに、唯一の負の相関を示すこの変数は注目されよう。

ただし、他の変数によって媒介された疑似相関である可能性もありうるので、上記 6 変数とさらに、社会調査上の疑似相関では常にうたがうべき「性別」もふくめて、7つの変数を共変量とし、内定取得有無を従属変数とする、二項ロジスティック回帰分析をおこなってみた（変数減少法：条件付き）。以下がその結果である。

モデルの要約

ステップ	−2 対数尤度	Cox & Snell R 2 乗	Nagelkerke R 2 乗
1	37.467(a)	.502	.689
2	38.524(a)	.493	.678

a パラメータ推定値の変化が .001 未満なので、反復回数 7 で推定が打ち切られました。

分類表(a)

	観測値	予測値			正分類パーセント
		未内定	その他1		
		.00	1.00		
ステップ 1	未内定 0 その他1	.00	37	3	92.5
		1.00	5	17	77.3
	全体のパーセント				87.1
ステップ 2	未内定 0 その他1	.00	34	6	85.0
		1.00	3	19	86.4
	全体のパーセント				85.5

a 分割値は .500 です

方程式中の変数

	B	標準誤差	Wald	自由度	有意確率	Exp (B)
ステップ 1(a) x 挑戦安全	1.086	.527	4.242	1	.039	2.963
at 意欲人生	.461	.460	1.003	1	.317	1.585
bw 善人	-1.439	.501	8.246	1	.004	.237
ca 情ためな	.798	.398	4.022	1	.045	2.221
ck 無酒平気	1.198	.533	5.056	1	.025	3.314
cm 借金	.857	.315	7.415	1	.006	2.355
性別1女0男	2.004	1.138	3.100	1	.078	7.422
定数	-16.380	5.705	8.244	1	.004	.000
ステップ 2(a) x 挑戦安全	1.081	.492	4.834	1	.028	2.948
bw 善人	-1.352	.488	7.677	1	.006	.259
ca 情ためな	.925	.372	6.174	1	.013	2.521
ck 無酒平気	1.190	.514	5.363	1	.021	3.288
cm 借金	.860	.294	8.559	1	.003	2.363
性別1女0男	2.119	1.133	3.499	1	.061	8.320
定数	-15.222	5.202	8.564	1	.003	.000

a ステップ 1: 投入された変数 x 挑戦安全, at 意欲人生, bw 善人, ca 情ためな,
ck 無酒平気, cm 借金, 性別1女0男

以上である。他の、相関があった諸変数ならびに性別とともにロジット回帰にかけても、「善人」は依然として従属変数に対しての効果を示しており、唯一の負の効果をもつ変数でありかつ最大級の wald 統計量を示している。

【「善人」は内定とれない?】

以上のように、自分のことを善人とおもっている学生ほど、内定をとっていない、ということは、少なくとも今回のわれわれのデータに関してはたしかなことであった。また、他の諸変数の合成による疑似相関であるという嫌疑も、今回われわれが計測した諸変数についてとはいえなさそうである。

では、このような「自分のことを善人とかんがえている学生ほど、内定とれない」現象をいかに解釈することができるだろうか。

もちろん、いろいろな解釈案が可能だろう。が、まずは、ある種の常識と「逆」の意外な相関であることを確認すべきだろう。ほとんどの会社はコーポレーションというぐらいだから、ゲーム論的には協力するか裏切るかのゲーム（ゲーム論でいうジレンマゲーム）の様相を大なり小なり呈しているだろう。そこにおいては、裏切らないし「手を抜く」ことを好む「悪人」よりも、協力することを好む「善人」が選好されるだろう。であるのに、データが示した相関は「逆」であった。

この「負」の相関にかんしていろいろな解釈がありうるだろう。私としては、本稿で、議論してきた「意味」の視点から一つの解釈仮説を提案してみたい。すなわち、「自分のことを「善人」だとかんがえている学生」ほど、上記でいう「自分の行為に対する自他弁証」の度合いが高く、それが、本稿後半で述べた、「就職（就社）への思いこみ」の強さに結びつき、それがかえって、内定のとれなさにむすびついてしまったのではないか、と。

もちろん、これはいくつも考えられ得る「解釈案」のひとつすぎない。この解釈自体、いくつかの「推論のステップ」をつみあげたものだ。よって、これらの推論の個々のステップ自体をまた、実証的検証にかけることが望まれる。また、もっと直裁に、就社への自他弁証の質が上記のようであってその度合いが高い学生ほど、内定をとる率が低いという相関を実証することが

望まれるだろう。来年の後期（内定が出たあと）の社会調査ではぜひ調査してみたい。

このように、ここでみいだしたわれわれの調査にもとづくデータ上の振る舞いは、たかだか本稿の視点を支持する「状況証拠」にすぎない。しかし本稿で述べた理論的スタンスならびに、後半で述べた「就職をめぐる、非合理的選択」現象への本稿の視点からの分析は、今後も追究していくに値するものと感じられる。

【文献】

- Beck, Aaron T. 1976 *Cognitive therapy and the emotional disorders* = 大野裕 訳 1990
『認知療法：精神療法の新しい発展』 岩崎学術出版社
- Gazzaniga, Michael S. 1985 *The social brain : discovering the networks of the mind*
= 杉下守弘、関啓子 訳 1987 『社会的脳：心のネットワークの発見』 青土社
- 工藤恵理子 2000 「抑鬱リアリズムによって見えてきたこと」『現代のエスプリ』 392号
至文堂
- Norretranders, Tor 1998 *The user illusion : cutting consciousness down to size* = 柴田裕之 訳
2002 『ユーザーイリュージョン：意識という幻想』 紀伊國屋書店
- 桜井芳生 2006 「ナッシュ=ハーサニ交渉解的権力論の再開にむけて—「ゲーム・闘争・意味」社会学試論/構造的に同一であるが、ナッシュ交渉解的に異なるゲーム—」『社会分析』 第33号 日本社会分析学会

英題目) From Darwinian Sociology to Hybrid Action Theory
Yoshio SAKURAI